

豊田市小原の紙漉き工芸師かのうともみひさし との文化交流のお誘い



～豊田市小原で和紙を漉く人として、皆さんと交流できる喜び～

かのうともみひさし(加納登茂美・恒)

1500年ほど前、奈良時代に紙の製法と材料に用いる植物が中国から伝わり、その後急速に和紙漉きが国内に広まっていきました。同時に漉く技法、用いられる植物素材も改良されていき、平安時代後期には流し漉きが完成されています。

現在の日本国内での手すき和紙の産地での漉き方はこの流し漉きを採用しています。

私共の地元、豊田市小原地区には600年ほど以前に美濃から和紙漉きが伝えられました。現在の小原和紙制作工程は他の産地とは大きく異なり、「半流し漉き」といわれ、「溜め漉き」から「流し漉き」へ移行する中間点にある漉き方です。

その特徴は、一枚ずつ異なる紙を漉く事に長けており、様々な素材を一度に用いたり、サイズや形が自由になる反面、薄く強い紙を大量に漉く事は難しいです。

江戸時代には産業としての和紙漉きは頂点に達し、江戸の町では和紙のリサイクルの仕組みが整っていました。19世紀中頃の明治維新には洋紙生産が始まり、和紙生産は急速に減少していきました。この三河森下和紙という名で知られた小原地区も例外ではなく、昭和初期になると紙漉きをする家は目に見えて減ってしまいました。

そのようなときに碧南市出身のアーティスト、藤井達吉が小原に入り、地元の若者を指導、多くの芸術家を育て、やがてこの地に新しい和紙の作品が生まれました。和紙という素材を用い、作品へと昇華させていった私たちより以前の、親の世代です。

現在の私どもは、それとはまた異なった方向へ進み、和紙を漉き、作品を制作しています。素材としての和紙はそのように、多様な要請に十分応えてくれる本物の素材です。

小原は豊田市の中心部から北へ30kmほどの山間にあり、風化花崗岩を通して得られる豊かな清水は、和紙を漉く事には最適の自然水です。野生樅もこのあたりでは、容易に手に入れることができ、何種類かの和紙の素材を用いて和紙を制作しています。

私どもは自然と共生しながら独自の紙を漉きますが、2019年の秋に紙漉きワークショップや講演・勉強会などを通して、多くの皆さんと交流できれば大変幸せに思います。

ご要望はJBSDかJCDにお寄せください。 www.jbsd.org www.jp.jcd-mi.org



